# 陸奥国尾太鉱山に関する一知見

長谷川成一

尾太鉱山（現青森県中津軽郡西目屋村）は、陸奥国弘前藩領最大の鉱山で、かつて銀、銅、鉛の非鉄金属を大量に産出した（図1参照）。寛政八年（一七九六）秋、当鉱山の付近を旅行した菅江真澄は「雪の母呂太奇」に、「オツフの名はもと蝦夷いへるなるべし」と地名の由来を記し、出羽国との境にそびえる山の「銅ほるところ」と、銅鉱山であると述べている。十八世紀後半に入って尾太鉱山は、銅の産出が盛んになっていたから、このように真澄は記述したのであった。

ところで筆者は、一九九七年九月、佐々木潤之介氏をはじめとする鉱山研究会の皆さんに同行して、島根県大田市の石見銀山の調査に参加した。大田市教育委員会の遠藤浩巳氏のご案内により同銀山の現地踏査を行った。そこで我々一同が最も驚かされたのは、銀山（仙の山）山頂の東に広がる、石銀地区の鉱山町の遺構であった。「石銀地区（一）石銀Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査概報」一（一九九七年二月）によれば、石銀地区は、戦国時代から江戸時代にかけて、銀鉱石の採掘や製錬が盛んに行われた場所で、約二〇ヘクタールの範囲に、露頭掘りや坑道などの採掘跡、住居や精錬所の跡と思われるテラス（平坦地）や石垣、池・井戸・墓地などが分布。標高五〇〇メートルの高所に町ができたのは高品位の鉱床があったからという。この地域を総称して「標高五〇〇メートルの鉱山都市」とも呼んでいる。『石見銀山遺跡発掘調査概要』八（島根県大田市教育委員会　一九九七年三月）には、さらに詳細な報告が寄せられており、製錬を行った吹屋跡の内部には、選鉱作業（粉成）と製錬作業（床吹）の施設があり、出土した陶磁器などの年代から十七世紀前半の時期と考えられている。また吹屋を建設した平坦地が石垣や石列を用いて大規模に造成され、道路もあわせて敷設され、国内外の陶磁器が大量に見いだされたことなどから、石銀地区に鉱

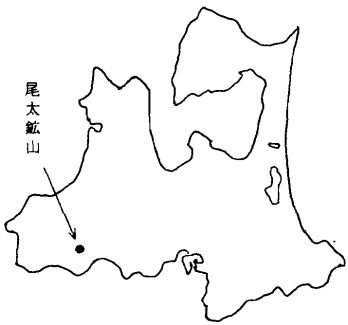


図1　尾太鉱山の位置

山の町が存在したのは間違いなかろうという。

右の調査概要によれば石見銀山では、これまで採鉱・選鉱・製錬について具体的にどの場所でどのような内容の作業が行われていたのか、未解明であったという。今回の発掘調査がその点でも銀山経営の実態に迫る意義を持つものであるとしている。

ひるがえって、本稿で取り上げる尾太鉱山にあっては、いかがであろうか。尾太鉱山の由来や概観を詳細に記した鉱山旧記の「山機録」（『日本鉱業史料集　第一期　近世篇二』白亜書房一九八一年）は、明和年間に成立。十八世紀後半の同鉱山については、「山機録」に依拠して解明可能な点が多いものの、十七世紀の開発当初に関してはこれから研究を積み重ねて行く必要があろう。

それはともかく尾太鉱山の創業に関しては、「津軽一統志」慶安三年（一六五〇）条に、尾太寒沢にて銀の採掘を開始した記事が見える。しかし本格的な尾太鉱山の開発は、「弘前藩庁日記国日記」（弘前市立図書館蔵、以後、「国日記」と略記）によれば、弘前藩では寛文三年（一六六三）に領内金銀見立ての者を派遣して、鉱山開発の可能性を組織的に調査させた。その結果、尾太に隣接する寒沢鉱山の仙台五郎左衛門間歩より金の産出を見たことから、同藩の鉱山開発に拍車がかかったのは間違いなかろう。

尾太鉱山で本格的な産銀を見たのは、延宝年間に入ってからであった。「国日記」延宝四年（一六七六）十一月九日条によれば、尾太の銀山と銅山両方を見立てたところ、ともに鉱山として経営が成り立つという報告があり、採掘開始の許可を与え飯米の給与も行うことに決定した。翌年五月には、「大銀之銀筋」が発見されて、従来の二倍に相当する産銀が見込めることになった（「国日記」）。弘前藩では、急遽、尾太の「大吹銀座」と「灰吹銀座」へ命じて銀の精錬量を飛躍的に増加させる措置をとった。年間の産銀量は、約六〇〇から七〇〇貫ほどであったと推定されるが、貞享年間には、もはや銀の生産量は減少傾向をたどり、銅鉛生産に重点を移行したようだ（同前）。このように尾太では延宝年間が銀産出の最盛期であったらしく、諸国から採掘、製錬のための技術者を大量に集め、延宝五年の「おつふ御町屋敷御絵図」（弘前市立図書館蔵）には、鉱山町の形成されていた様子が描かれている。延宝四年の「御銀山所々御入用之惣差図」（同前）によって、「御銀大吹座」「はいふき大銀座」「はいふき床大工」「大吹床大工」「せり場」など製錬を行う一連の施設が存在したことが判明する。また同絵図には、製錬施設が鉱山町と隣接しているように描かれており、前掲「おつふ御町屋敷御絵図」も同様に鉱山町とこれらの施設が隣り合っているように描写されている。

それではこれらの施設や鉱山町は、尾太のどのあたりに所在していたのであろうか。尾太鉱山を描いた景観図の、文化四年（一八〇七）「尾太山図」（弘前市立図書館蔵）によれば、湯ノ沢川をはさんで、西側に尾太岳がそびえ、同岳の中腹から上部にかけて坑道の入り口が何カ所か描かれ、東側には、「床屋」「役所」「釜屋」「炭入物置」などの諸施設が描かれている。またほぼ同

年代と推定される「尾太山之図」（青森県立郷土館蔵）にも同様に「台所」「焼釜」「鍛冶」「細工所」「釣（汰）場」「材木蔵」「古釜」が描き込まれており、尾太岳の麓、湯ノ沢川沿い東側に製錬の施設が存在したことが判明する。これらの絵図類によって問題は解決したように見えるが、前記石見銀山の実地踏査をして石銀地区の状況を実見した結果、十七世紀中葉、尾太鉱山の開発を開始した当初と、衰微の兆候が著しく表れてきた十九世紀前半の時期とは、実は相違するのではないかと思い始めたのである。絵図類を子細に検討したところ、尾太でも銀の産出が盛んであった時期には、採掘、製錬などの施設、鉱山町は、尾太岳の麓ではなく、かなり高度の高い位置に存在したのではなかろうか。

前掲文化四年（一八〇七）「尾太山図」の、尾太岳のほぼ山頂に近い箇所に描かれた坑道の入り口付近に貼り紙が付されている。それには「此所姥鋪と申候而常ニ出入之口」（図2参照）との記述が見える。姥鋪（うばしき）とは、「山機録」によれば、「初テ鋪口ヲ付ルヲ姥鋪ト云、又鋪口ヲ釜ノ口ト云、四ツ留トモ云」とあり、鉱山で初めて坑道が掘られた坑口を姥鋪と命名するのだという。他の鋪には「弥惣左衛門鋪」など、その坑道を掘った金穿（かなほり）の名前が付されることが多く、鉱山では姥鋪が特別な位置づけをされていたようだ。延宝四年の「御銀山所々御入用之惣差図」には、一連の製錬施設の中で南西の隅に「四ツ留口」が記されており、鋪口が描かれているのである（図3参照）。前述のように同年から本格的な銀の生産を開始しており、ここに見える「四ツ留口」とは、姥鋪のことであろう。文化四年の「尾太山図」の貼り紙にも、姥鋪から鉱夫達が常時坑内へ出入りしている旨が明記されていたことからも、姥鋪は十九世紀の初めにあっても特別な位置を付与されていたようだ。また製錬施設の西側には、御番所を通して「買師町」（買石師の居住町）、「山師町」「吹屋町」「商町」への入り口が設けられているので（「御銀山所々御入用之惣差図」）、鉱山町も隣接していたと見て支障なかろう。

以上のような状況から、尾太鉱山では開発の当初、鋪口に隣

**図2　尾太山図**（弘前市立図書館蔵）

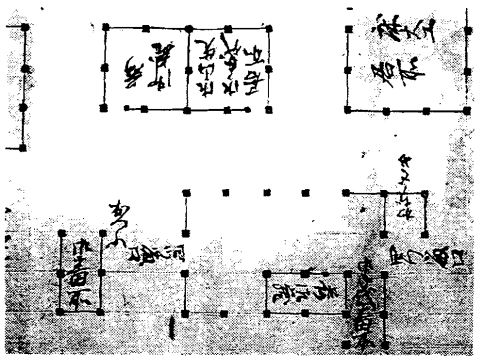

**図3　御銀山所々御入用之惣差図**
（弘前市立図書館蔵）

接して製錬施設が設けられ、場所は姥鋪の記述からするならば、十九世紀初めの絵図類に見える尾太岳の麓、湯ノ沢川の東側ではなく、尾太岳の上方、かなり高度の高い地にあったと判断される。おそらく石見銀山の石銀地区と同じく、鉱山町も同様の形態を保持したのであろう。文化四年（一八〇七）「尾太山図」の姥鋪の付近に山小屋として鉱夫達の居住地域が記されているのを見れば（図2参照）、かつての鉱山町の名残りがそのように描かれたのではあるまいか。

それでは尾太岳の山中から、麓の湯ノ沢川東岸へ製錬施設が移転した時期と理由を考えてみたい。紙幅も限定されているので、簡単に触れることにしたい。尾太における銀の産出量が最高に達したのが、延宝期であり、貞享期には銀を掘り尽くし生産量が著しく減少したことはすでに述べた。さらには坑内の出水にも悩まされ、水抜き普請が大きな負担となって藩財政にのしかかってきた。そこで弘前藩では、当鉱山を藩が直営する直山から銀主と山師へ経営を大幅に委譲する請山とし、銅鉛鉱山として再生することに方針を転換した（以下、特に出典を断らない限りは、すべて「国日記」によっている）。享保十九年（一七三四）、水と煙抜きの普請工事が成功して出水と煙の排除が可能になった結果、「八丁立五月直り」という銅鉛の大鉱脈に突き当たった。銅鉛の大増産がなされ、年間約九〇〇〇箇（約四四〇トン余）の生産に到達したという。同藩は均しでも年間一〇万七〇〇〇貫から一〇万八〇〇〇貫余の銅鉛を、大坂へ廻漕したようだ。当時の尾太山の総人数は、二三〇〇から二四〇〇人ほどであり、そのうち鋪方は八〇〇人に達したという。銅鉛山として尾太鉱山は、十八世紀の前半に最盛期を迎えたのである。つまり尾太は十七世紀後半の銀山としての最盛期と、十八世紀前半の銅鉛山としての最盛期の、二つのピークを持ち得た鉱山といえよう。

ところで尾太は、十八世紀前半にかつてない規模に膨れ上がった人口を、従来の町の枠組みではとうてい支えきれなくなったのではなかろうか。加えて製錬量も飛躍的に増大する状況下では、既存の各施設で処理しきれなくなり、比重選鉱に必要な大量の水を確保するためにも製錬施設などを湯ノ沢川岸へ移動する必要に迫られたのではないかと推察する。享保期の銅鉛大増産の時代こそ、施設類を尾太岳の山中から麓へ降した時期であり、我々が絵図類で見ている尾太鉱山の姿なのであろう。筆者には、そのように思えてならない。

この後、当鉱山では銅鉛の生産額が凋落する一方で、さらには深掘りによる出水と、出荷する製品の品質の低下にいっそう悩まされるようになった。文政期には、最盛期の享保期と比較して銅鉛の生産高は二・八パーセント程度に低下し、鉱山の従事者は一割にも満たない数に減少した。弘前藩は安政期に至り、山勢の衰え著しい当鉱山の情勢を鑑み銅鉛の増産を断念して、銀の絞り立てに重心を移したようだ。しかし大がかりな開発事業を行える状況になく、技術的にも資金的にもかつての山勢をついに回復することはなかった。近世尾太鉱山の終焉である。

（はせがわ・せいいち　弘前大学人文学部教授）